

〈修士論文要旨〉

## 近畿地方前半期押型文土器期の地域間関係

熊 谷 博 志\*

本稿は近畿地方における前半期押型文土器期の地域間関係を明らかにすることを目的とする。

近畿地方においては奈良県・三重県に該期の遺跡が集中し、また当該地域は押型文土器群成立の一端を担う地域でもあるため、両地域を詳細に検討することにより、その成立と展開の様相をより明らかにするだけでなく、具体的な地域間の集団関係についても言及できる可能性が高いと考えられる。そのため、本稿においては大和高原を中心に奈良・三重県の29遺跡を対象として検討をおこなった。

押型文土器の両地域の差異を時空間的に捉えるため、先学の研究を踏まえ当該土器群の諸属性のうち、器形、口縁部の刻み位置、文様構成、押型文原体の文様割付方法、押型文文様の分類をおこない、これら属性の属性分析に基づく型式学的検討により既存編年に対応し、且つ詳細な地域間比較が可能な大別Ⅴ期、細別11期の本稿独自の編年案を設定するに至った。

編年案に基づき両地域の通時的動向を観察した結果、当該土器群の成立期にあたるⅠ期～Ⅱ期-1においては両地域は斉一的な様相を呈するが、Ⅱ期-2には地域性があらわれ、さらにⅢ期-2において技術基盤を異にする程の地域性を有する様相が窺えた。しかし、Ⅳ期においては再び両地域が斉一的な様相を示すようになり、Ⅴ期もまたその様相を継続させる点が示された。

しかし、Ⅳ・Ⅴ期において斉一的な様相を呈するのは三重における遺跡と集団の減少によるところも大きく、断片的な資料を収集した結果導かれた様相といえる。また、該期には近畿以東に由来するものと考えられる非在地的な土器群が認められるようになる。これらは比較的三重に多く認められる傾向にありながらも決して主体的な分布は示さず、また在地土器と共伴しているため、両者の関係性は決して希薄なものでもなかったと考えられる。

このことから前半期押型文土器期は両地域の関係性は一定ではなく、斉一性と非斉一性を各期で生じさせながら非在地的土器との関係により様相を変化させて展開してきたと考えられる。しかし、この地域間関係が何に起因するものかは土器以外の検討を加えなければならないため、今後の課題としたい。